

京都大学	博士（文学）	氏名	妹尾 裕介
論文題目	土器からみた弥生文化の成立とその背景		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本学位請求論文は、北部九州地方において水田稲作を開始したことを契機として成立する弥生文化が、西日本各地（瀬戸内地方、近畿地方）に拡散していく過程を、土器を対象とした考古学的な分析を通じて明らかにし、弥生文化が広まった意義と、その背景にある地域間関係を論ずることを目的とする。</p> <p>序章では、本論文で土器研究を展開する前提として、人類史的視野から、アジアにおける土器の出現について概観した。西アジアでは先に農耕が開始され、そののちに土器が出現する。この要因としては、土器を必要としない調理文化（ムギ粉食文化）があったことが大きい。一方、東アジアでは土器が先に出現する。この要因については、魚介類の加工、調理と、厳しい自然環境のなかで可食できる植物を増加させるために、加熱調理容器が発達したと考えた。そして、東アジアの土器の用途と機能のなかに縄文土器を位置づけた結果、縄文土器は、主食、副食の別をもたない加熱調理を基本的な用途とする容器であることが判明した。水田稲作による米食のはじまりは、主食、副食の食材の違いによって、土器をもちいた加熱調理方法に違い（炊飯と煮沸）が生じた可能性を示唆する。また土器が、加熱調理以外の用途（貯蔵、盛付）にも器種分化したことを示している。このような弥生土器がもつ機能は、現代にも通じるものであり、我々の文化の転換点をここにみることができ、その分析は重要な歴史的研究課題である。そこで、縄文時代、弥生時代に使用された加熱調理用の容器を、形態的な特徴も踏まえて一括して深鍋形土器と捉え、通時的にこの器種を分析していくことを主な研究視点として設定した。</p> <p>第1章では、本論文の土器研究方法を提示した。まず、縄文土器と弥生土器の研究方法の特質を把握するために、山内清男の縄文土器型式と小林行雄の弥生土器様式を取り上げ、それぞれ検証した。山内は縄文土器を大きくは一系統として捉えることを念頭において、土器の変遷を、地域を越えた連動性のなかでみることを目指した。その結果、縄文土器型式は時間的等価をもつ比較単位として設定されていく。一方、小林は弥生土器を水田稲作の文化指標として、土器の変遷を伝播のありかたとしてみることを目指した。その結果、弥生土器様式は時間幅の異なる文化単位として設定されていく。これを踏まえ、縄文土器型式は生産段階のまとまりをみて、それを時間の単位とするのに対して、弥生土器様式は消費段階のまとまりをみて、それを文化の単位とするという違いがある、と結んだ。</p> <p>本論文の目的は文化に焦点を当てることにあるので、弥生土器様式の方法論が適切</p>			

だと考える。しかしながら、弥生土器様式の手続き方法には、土器群のまとまりの時期決定の判断を、遺構での一括資料のみに頼る、という問題点がある。そこで時期決定には、縄文土器型式の方法論を適用して出土資料の時間幅を確定することとし、本論文独自の方法論を構築した。具体的には、ひとつの器種の器形を型式学的に検討することで、生産段階の土器の時期指標を作成し、これにより、対象とする土器群の時期幅を確定する。そのうえで、土器群同士で時期幅のありかたを検証することで、消費段階の土器の組み合わせを決定し、ここに文化をみいだすこととした。

こうした方法論の適用・実践として、第2章から第4章では、近畿地方を中心に、縄文時代晩期前半、縄文時代晩期後半、弥生時代前期の三時期における土器編年を示した。縄文時代晩期前半をあつかった第2章では、当該期を特徴づける無文深鍋形土器を対象として、型式学的な検討をおこない、それをもとに1期から6期の計六期に分けて、土器の組み合わせを提示した。無文深鍋形土器は後期土器の器形に系譜がたどれるが、外反口縁を形成していくなかで、3期にその系統が分離する。また、無文深鍋形土器と組み合わせる浅鉢形土器も、2期と3期とで文様構成に変化がみられる。これらは西部瀬戸内地域の影響による。広域に斉一的な、深鍋形土器と浅鉢形土器の組み合わせがみられるのが縄文時代晩期前半の文化といえ、西日本一帯で深鍋形土器の無文化が起きることとも関係がある。土器づくりに地域的な差異が少なくなることは、社会体制が変わったことを意味する。この体制は、凸帯施文方法が成立し、晩期後半に深鍋形土器が再施文化されるまで維持される。

縄文時代晩期後半をあつかった第3章では、当該期を特徴づける凸帯文深鍋形土器を対象とし、型式学的な検討をおこなった。凸帯の貼り付け方法と口縁部の調整方法を複合的に捉えて凸帯施文方法を認識し、分類した点が、これまでにない新視点である。深鍋形土器にみられる凸帯施文方法は、小地域（河内地域、摂津地域、播磨地域、阿波地域）のあいだで違いがみられ、ここから当時の詳細な地域間の関係を知ることができた。とくに播磨地域と河内地域のあいだでは、凸帯施文方法の違いが明確である。さらに播磨地域は、瀬戸内地方とつながり、河内地域は東海地方の影響がうかがえるので、縄文時代晩期後半では、同じ近畿地方の中で異なる土器文化圏が形成され、地域の独立性を帯びることが文化的な特徴である。また、7期から11期までの計五期における土器の組み合わせを提示した。8期にあらたな器種として壺形土器がみられることが、大きな画期となる。また11期は、浅鉢形土器に多様性がなくなるとともに、その数を減らし、縄文土器の伝統的な器種構成が変化する時期で、土器からみた縄文時代の終焉期に位置づけられる。

弥生時代前期を対象とした第4章では、西日本の弥生時代のはじまりを特徴づける遠賀川系土器のうち、深鍋形土器に着目した。先行研究では、弥生土器の器種構成を特徴づけるものとして、壺形土器が取り上げられてきた。本論文で弥生深鍋形土器に着

目したのは、縄文時代晩期後半の凸帯文深鍋形土器とおなじく加熱調理の用途が推定されるため、同じ視点による時期的な比較が可能だと考えたからである。弥生時代前期には、遠賀川系土器が斉一的な文化内容をもって西日本各地に分布する。しかし近畿地方のばあい、伝播した遠賀川系土器に、在地の土器製作技法が合わさって畿内第Ⅰ様式が成立するので、そこには遠賀川系土器の影響と凸帯文土器の影響がみられる。深鍋形土器を型式学的に検討した結果、器形にふたつの系統をみいだし、それぞれ凸帯文土器と遠賀川系土器との器形および施文方法に共通点をみいだした。この系統の差を土器の用途の差とみなせるかは、今後の課題である。また、12期から14期までの計三期における土器の組み合わせを提示した。12期には、凸帯文土器との影響関係がうかがえる器形が存在し、壺形土器の胴部形態にも多様性がみられ、土器の組み合わせがいまだ確定的ではないことがうかがえた。

第5章では、第2章から第4章で提示した1期から14期までの編年をもとに、縄文時代晩期前半から晩期後半への移行過程と、縄文時代晩期後半から弥生時代前期への移行過程をみることを目的にした。前者では、深鍋形土器の無文化を通じた近畿地方と中部地方の関係を検討し、深鍋形土器にみられる器形の組み合わせに共通点がみられることと、当該期に近畿地方が東日本との関係を強めはじめたことを指摘した。後者では、河内地域における凸帯文土器と遠賀川系土器のありかたを、遺跡から出土した状況をもとに分析し、遺跡内で両者が断絶せずにつづくことを示した。

遠賀川系土器は伝播してきた土器情報であり、人々の移動が想定される。したがって、農耕集団が移住してきた結果として各地で弥生土器が成立するのか、あるいは在地の集落に遠賀川系土器の情報をもつ少数の人々がはいることで弥生文化が成立するのか、という議論が生じている。さらに人々の移動を要因として、生業が転換する過程では、縄文文化をもつ集団と弥生文化をもつ集団が、生業を別にしながら同地域内の住み分けていた、という考えを生んだ。こうした生業別の住み分け論については、凸帯文土器と遠賀川系土器の出土状況の分析結果と、縄文時代の集落の性質を検証して、これを否定した。

一方で、編年の11期と12期は土器の特徴に一致がみられ、地域内の分布に違いがみられることから、凸帯文土器と遠賀川系土器の時期は重なりをもっていたと考えられる。11期の凸帯文土器が遠賀川系土器の特徴に似ることから、水田稲作の情報も共有していた可能性がある。このことから、生業を同じくして土器は異なる、という住み分けが考えられる。今後は、なぜ混在せずに違う土器をもつ集団が存在したのか、また弥生土器の成立が階調的ではなく、モザイク的に進む要因を追究する必要がある。

本論文の研究対象となる土器群を、編年研究とは別の視点で分析したのが、第6章と第7章である。第6章では、「無文」という要素にしぼって検討をおこなった。土器の文様のつけかたに着目した概念としては、文様要素の量にもとづく「精製」、

「粗製」の概念がある。これを「有文」、「無文」という概念と対比する考え方もあるが、これらの概念は合致しないことを説明した。まず、文様要素を比較する概念として「精製」、「粗製」があるのに対して、「有文」、「無文」は、文様の有無で分けられている。また、「精製」、「粗製」は、深鍋形土器という一器種に対して使われるのに対し、「有文」、「無文」は、器種を問わず使われる点で異なる。こうした違いを明らかにした上で、「無文」を、文様系統のひとつとして捉える必要を指摘した。そしてこれを有効的に活用しつつ、器種構成を主眼とした縄文土器を、「複合施文土器」、「単純施文土器」、「無文土器」の三つに捉えなおした。分析の結果、「複合施文土器」と「単純施文土器」が関係性をもつものに対して、「無文土器」は前二者とは異なる構造をもつことを明らかにした。「複合施文土器」と「単純施文土器」の関係は、「精製土器」、「粗製土器」の概念を適用して考えることができ、この両者を比較、検討することで、施文方法からみた社会的なつながりをみいだす社会論の展開が期待できる。

以上のような概念規定にもとづき、近畿地方の無文土器を対象として、深鍋形土器の器形の組み合わせに、無文という文様属性がどのように影響したのかを追究した。縄文時代の中期末ないし後期初頭から器種構成にみられるようになる無文土器は、文様をもち地域的な個性がある土器群（有文土器）とは連動せずに、地域を越えて広範囲に分布する。土器の無文化は、それまで多様的に発展してきた文様技法を背景に、多種多様な文化が生じていた土器の性質が変容したことを意味し、これとともに西日本においては、有文土器の特徴の類似度が高くなっていく。こうした現象の中なかに、縄文土器を文様からみたばあいの大きな画期が読み取れる。

また、無文深鍋形土器について、形態的な情報と成形技法に着目することで、その構造的な理解を目指した。無文深鍋形土器は深鍋形土器の器種構成のなかで、半分を占め、別器種として機能していた可能性が高い。後期に必要とされて確立していく無文深鍋形土器は、晩期の土器の特徴にまで発展し、凸帯文深鍋形土器が出現するまで維持される。西日本一帯で同時に起こる深鍋形土器の無文化の背景には、後期に文様系統のひとつとして出現した「無文」の存在が大きい。このように、縄文時代晩期前半に盛行する無文深鍋形土器は、後期土器の構造の変化から追えることを示した。

第7章では、壺形という形態に着目して考察を進めることで、縄文時代の晩期の壺形土器と、弥生時代の前期の壺形土器との関係性を論じた。土器からみて、弥生時代の始まりを特徴づけるのは、貯蔵形態の土器として認識されている壺形土器の急激な増加である。それぞれの時期は異なるが、九州地方から関東地方において、壺形土器が三割近くまで急増する現象が共通してみられることから、日本列島規模でみられる貯蔵の需要の高まりが、弥生時代のはじまりの指標のひとつであると考えられる。いち早く水田稲作が開始された北部九州地域では、壺形土器は凸帯文土器と組み合わせ

る。一方で、同時期の水田稲作の証拠がない瀬戸内地方、近畿地方、東海地方でも、壺形土器が安定的に出土している。

本論文では、西日本における縄文時代の晩期後半の壺形土器に、壺形土器の成立の由来の違いを認めて、無文土器系壺、浅鉢変容型壺、深鍋変容型壺、大洞系壺と系統ごとに整理して、これらの関係について追究した。その結果、晩期後半の近畿地方は、凸帯文土器が盛行している点では西日本の文化圏に属すが、壺形土器からみると、土器製作技法の共有から東日本とのつながりが強かったことが判明した。器種によって地域間の結びつきに違いがみられることは、一方向的ではない土器情報を介した人々の交流を物語る。そして、この結びつきは、凸帯文深鍋形土器の口縁形態にも影響を及ぼす。第3章でみた近畿地方の土器様相の変遷が、壺形土器との関係に要因が求められることが、第7章の分析から明らかとなった。とくに河内地域で盛行する深鍋形土器の口縁部の内傾化は、壺形土器の口縁形態に由来し、ここに東日本の影響を認めることができる。

終章では、通時的な編年的な研究をおこなった第2章から第4章、時期的画期に注目した第5章、特定器種を通してみた地域間関係に着目した第6章、第7章での研究成果を総括し、土器の変化要因、土器の組み合わせの変遷、複合的な土器研究という三つの視点から、土器から当時の社会体制を復原する社会論を展開すべき今後の指針を示した。

まず、土器の変化の要因は、消費段階の土器の組み合わせをみることによって、追究できる。第2章と第5章で検討した無文化や、第3章と第7章で検討した壺形土器を介した地域間の結びつきを要因として捉えることで、土器の変化を説明することができた。次に、土器の組み合わせの変遷は、第2章から第4章での検討を通して確認された。6期と7期、11期と12期のあいだにおける画期については、第5章で詳しく分析した結果をもとに、深鍋形土器の再施文化、凸帯文土器と遠賀川系土器の関係が重要な意味をもつことを明らかにした。最後に複合的な土器研究については、第6章と第7章の分析結果と編年を比較研究することで、編年でみえてくる地域間の結びつき以外に、文様要素や器種という視点でみえる地域間関係が存在することが提示された。以上のように、土器研究を階層的に進めていくことが、文化の実態を明らかにする社会論へとつながることを示した。

本論文での検討結果、縄文時代の後期に出現する無文土器によって、地域ごとの伝統的な土器製作の体制（小地域文化）が変化し、晩期前半には、斉一的な土器製作技法が、西日本において広域的に分布する広域文化圏が成立することを明らかにした。この文化圏のなかで、地域間関係をもとに、小地域文化は再構成されていった、近畿地方の場合、東日本との土器製作方法の交流を通じて、小地域文化を確立していく。こうして生じた小地域文化は、晩期後半になり再度、凸帯文という施文方法によって

広域文化圏が改新されるなかで、小地域文化は解消され再構成されていく。とくに、北部九州地域に大陸から水稻農耕技術が伝播する結果、広域文化圏は不安定となり、小地域文化がつよくなる。そうした不安定な広域文化は、遠賀川系土器が伝播していくなかで、弥生土器が成立することで改新され、弥生文化が展開していくと考えられるのである。

(論文審査の結果の要旨)

本来、用いられる土器の違いで区別されてきた縄文時代と弥生時代は、調査研究が進む中で、主たる生業の違いによって定義されるようになってきた。しかし、九州北部ではじまった稲作農耕が、いつ、どのようにして日本列島各地に伝わったのか、またそうした社会の変化を読み取るための考古資料の変化を、どのように理解するのかについては、さまざまな議論がなされてきたものの、いまだ意見が一致していないのが実情である。本論文は、従来の方法論の見直しを通して、近畿地方における縄文土器から弥生土器への変遷過程を再検討することによって、弥生文化の成立とその歴史的背景を明らかにすることを目的とした。

論者は、第1章において、縄文土器を研究するための山内清男の型式論と、弥生土器を研究するための小林行雄の様式論には、土器の変遷をどのように理解するのかについて、大きな違いが存在することを指摘した。そして、土器の分析を通して縄文時代から弥生時代への移行過程を明らかにするために、2つの方法論の長所を取り入れつつ、特定の器種の器形を型式学的に検討することにより編年を作成し、消費段階における土器の組み合わせを明らかにする、という方針を立てた。

こうした方法論の実践として、第2章から第4章では、加熱調理用に用いられたと思われる深鍋形土器を、主たる検討対象としてとりあげ、近畿地方における系統とその変遷が検討された。その結果、縄文時代晩期前半・縄文時代晩期後半・弥生時代前期を、1期から14期までに区分する土器編年案が提示された。そして第5章では、縄文時代晩期前半から晩期後半への移行過程の特質と、縄文時代晩期後半から弥生時代前期への移行過程の特質と、その歴史的背景が検討された。さらに第6章では、縄文時代後期土器に現れる「無文土器」の問題を、第7章では縄文時代晩期以降に出現する壺形土器の系譜の問題を取り上げ、対象時期における土器変遷の多様性を示した。

以上の検討においては、縄文時代晩期から弥生時代前期にいたる加熱調理用の深鍋形土器の変遷を明らかにすると共に、その変化の特質を当時の地域間関係の変化と関連づけて説明したことが、大きな成果であるといえる。中でも、「無文」・「有文」という概念を積極的に取り入れることにより、縄文時代後期に出現する無文深鍋形土器が西日本一帯に広がった後、晩期後半には凸帯文が登場することにより再施文化するものの、その施文技法には地域差がみられることを指摘することができた。こうした事実は、各時期における社会の様相を具体的に考えていく上で、重要な手がかりとなるものである。

一方、縄文時代晩期後半から弥生時代前期への移行過程においては、弥生時代前期における加熱調理用の深鍋形土器を型式学的に分析した。その結果、同器種にふたつの系統を見だし、器形および文様施文の共通点から、それぞれが縄文時代晩期後半の凸帯文土器と、九州北部から西日本一帯に伝播したいわゆる遠賀川系土器に関連づけられることを明らかにした。論者は、こうした系統差が存在する背景として、両系統の加熱調理用土器の調理対象および調理方法の違いを想定する。こうした推定を検

証するためには、土器に残されたスス・吹きこぼしなどの使用痕の検討や、炭化した内容物の分析が進められる必要がある。また、近畿地方における弥生文化の定着過程においては、凸帯文土器と遠賀川系土器の出土状況の分析結果と、縄文時代の集落の性質から、生業別の住み分け論を否定し、水田稲作の情報を共有しながら、使用する土器が異なる、といった住み分けが存在した可能性を提起した。こうした仮説についても、今後の調査研究の進展による検証が必要であろう。

また、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて壺形土器の系統と消長について、検討をおこなった点も評価できる。従来の研究では、壺形土器は弥生時代における土器編年を進めるために取り上げられ、その貯蔵機能は、弥生時代の土器様式を代表づけるものでもあった。しかし本論文では、縄文時代晩期以降、日本列島各地で壺形土器の出土量が増加したことを確認した。また、その由来の違いにより、無文土器系壺、浅鉢変容型壺、深鍋変容型土器、大洞系壺などの系統が存在し、それらの時空的様相の分析を通して、当時の地域間交流の実態を示すことができた。

本論文により、弥生文化の成立を検討するために必要な土器編年の基礎的な検討作業はなされたといえる。また、編年案をもとに検討された、縄文時代晩期から弥生時代前期にいたる土器系統の変遷および地域間関係の実態と、それを理解するために示された仮説により、今後の研究を進めていく上での方向性が提示できた点を評価したい。

しかし、こうした仮説の可否を検討し、論者がめざす「社会論」へとつなげていくためには、さらに検討すべき課題が少なからず残されている。まず、研究を進めていくための前提となるさまざまな概念規定をさらに明確にすると共に、近畿地方以外の西日本各地で同様の検討を徹底的におこない、より精緻な編年網を完成させる必要がある。また、この時期の歴史的理解をする上で大きな論点となっている、AMS法による理化学的年代をどのように評価するのかについて、論者自身の意見を表明しなければならないだろう。さらに、深鍋形土器が具体的にどのように使用されたのかについての検討も、今後進められていくべきであろう。こうした問題点については、論者も十分に理解しており、今後の研鑽により、解決されていくことを期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2016年6月20日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。